Fe高圧相のX線吸収分光測定と次世代 放射光光源への期待

広大院理 石松直樹

共同実験者: 佐田 祐介¹, 内藤卓郎¹, 圓山 裕¹, 綿貫 徹², 河村 直己³, 水牧 仁一朗³, 入舩 徹男⁴, 角谷 均⁵ (1広大院理, ²JAEA, ³JASRI, ⁴愛媛大GRC, ⁵住友電工)



2015/7/27-28 PF研究会「次世代放射光光源を用いた構造物性研究への期待」





R. Torchio et al., Phys. Rev. Lett. 107, 237202 (2011)



A. Dadashev et al., Rev. Sci. Instrum. **72**, 2633 (2001)

N. Ishimatsu et al., JSR (2012). **19**, 768-772



PRB **83,** 180409(R) (2011)

高圧下XAFSの将来展望 ・ お言温高圧下などの多重極端

- 超高温高圧下などの多重極端条件の測定
- XRD+XAFS等の複合測定の進展
- 高エネルギーX線(E > 20 keV)の積極利用
- イメージング(位置分解)XAFS
- 衝撃圧縮でのXAFS解析



- 問題点: Feのα-ε相転移における転移のトリガーは何か?
 - 加圧による強磁性秩序の乱れ
 - マルテンサイト変態
- Fe K吸収端のXMCDとEXAFSによる磁気相転移と構造相転移の同時観測
- Fe K吸収端EXAFSによるFeの局所構造の導出
 マルテンサイト変態の機構を精密解析
- 単結晶Feを用いたXRD実験:shear-induced転移の検証



XAFS実験 SPring-8 BL39XU



加圧:DAC 圧力媒体: <mark>ヘリウム</mark> 準静水圧を実現

試料: Fe箔(多結晶) *t*=4 μm NPD**アンビルを使用**

XANESとXMCDでみるα-ε相転移



• XMCDが消失したE相では強磁性秩序が消失

磁気相転移と構造相転移の比較



*P*_tで急激な変化. α相が60%に減少

その後,段階的にα相が減少し,非 磁性のε相が増加する ΔP=2.3 GPa

磁気相転移と構造相転移は同時 α相→強磁性 ε相→強磁性秩序が消失

相転移のトリガーはα相の強磁性の 秩序の消失ではない.

O. Mathon et al., Phys. Rev. Lett. 93, 255503 (2004)

• NPD使用により15Å⁻¹までの EXAFS振動を明瞭に観測

EXAFSでみる

Feの構造相転移

- 構造相転移によりEXAFS振 動が変化
- Athenaと Artemisを用いて EXAFSのデータ処理と解析



2

3

R (Å)

5

6

4

Feのα-ε構造相転移のプロセスと shuffleとshearの分離するEXAFSのモデル



- •マルテンサイト変態:shearとshuffleの2つの過程によってhcp構造に変形
- orthorhombic の単位胞(空間群: Cmcm)でbccとhcpの中間構造を表現
- •原子位置:(0, y, 1/4)
- yはshuffleを表す(1/4→1/3)
- θ_{b} はshearを表す(70.5° \rightarrow 60°)
- $y \ge \theta_b$ の圧力変化から、shearとshuffleの過程をそれぞれ決定できる

EXAFSによるshuffleとshearの分離



j-i	N_{j-i}	R_{j-i}^{eff} (Å)	description of R_{j-i}^{eff}	description of ΔR_{j-i}
1-1	4	2.429	$\sqrt{\left(\frac{a}{2}\right)^2 + \left[\left(\frac{1}{2} - 2y\right)b\right]^2 + \left(\frac{c}{2}\right)^2}$	$\left\{\frac{a\Delta a}{4} + b\left(\frac{1}{2} - 2y\right) \left[\Delta b\left(\frac{1}{2} - 2y\right) - 2b\Delta y\right] + \frac{c\Delta c}{4}\right\} / R_{1-1}^{\text{eff}}$
1-2	2	2.429	$\sqrt{\left[(1-2y)b\right]^2 + \left(\frac{c}{2}\right)^2}$	$\left\{b(1-2y)[\Delta b(1-2y)-2b\Delta y]+\frac{c\Delta c}{4}\right\}/R_{1-2}^{\text{eff}}$



- FeとFeのボンド長l_bは、P_tで一旦膨らんで、
 その後収縮する.
- shearはP_t直後に終了するが, shuffleは段 階的に進行する.
- shearとshuffleはdecoupled
- Feの相転移はshear stress-inducedの転移





- Burgers typeのモデルで説明できる
- shuffleが遅れて進行する.
 - •界面ではshuffleの進行が遅く、界面の数が減ると歪が緩和
- 転移が終了してもy=1/3より小さい → 歪んだhcp相の可能性

まとめ

- α-ε相転移における転移のトリガーは何か?
- •磁気相転移と構造相転移は同時
- Fe K吸収端EXAFSによるFeの局所構造の精密解析によりshearと shuffleの圧力変化の導出に成功
- 構造相転移にはshear stressが必要.
- •不完全なshuffle: 高圧相はhcpより対称性が低い構造?
- 現在,単結晶を用いた加圧実験でshear stress-induced転移の検証
 を進めている

今後の課題

- α-ε転移(マルテンサイト変態)の組織形成の観測が不可欠.
- ドメインのサイズとその分布・結晶方位を明らかにしたい。
- •コヒーレントX線やー軸性の強い衝撃圧縮実験が有用か?

謝辞:本研究は鉄鋼研究振興助成の支援を受けて実施しています.